

| | |
|------------------|--|
| Title | 離存形相の資料・形相論的構成について |
| Sub Title | On separate forms in hylo-morphistic system |
| Author | 松本, 正夫(Matsumoto, Masao) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1963 |
| Jtitle | 哲學 No.45 (1963. 12) ,p.1- 35 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | <p>Pure spirits, called angels, have been defined as separate forms in Aristotelian ontology. If these are mixed up with God, the absolute on the one hand and with bodily human being on the other hand, thereof came out modern idealistic subjectivism. Neo-Platonism, a descendant of Indian Atman-philosophy, has missed the distinction between pure act and pure forms, i.e. God and angels. And Descartes and Kant, sources of German idealism handled human separable forms quite same as angelic separate forms. The application of matter-form principles to plants, animals and human beings, the gradation of empirical world, proved the well-fitness of the matter-form system. So if we extrapolarize this system in the direction of the lowest matter, we can get to the pure matter at the extreme, though, however, this matter is only a thinkable one and not a being in reality. In order to exist, even the most material substance must be composed of matter and it's own form. On the contrary, we can also extrapolarize the same system in the direction of the highest form and arrive at the pure form in the extreme. And this time this pure form is proved to be not only a thinkable one in mind but exist as a true real being. From the hylo-morphism we deduced also the following theses: the separate forms which can be "entia realia" even without their material "substratum", have the cognitive faculty of "intellectus agens" and at the same time possess self-conscious and self-determining personality. However, the primarily necessary matter for them, is that they are cognitive. Their self-consciousness and self-determination are rather secondary, even derivative for them. These belong exclusively to God, to the absolute alone. All finite and relative intelligences never apriori possess such natures, they are rather endowed with these natures as acquired "habitus". So we do not admit that premise of modern epistemology, insisting that the cognitive consciousness is just a self-consciousness.</p> |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000045-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

離存形相の質料・形相論的 構成について

松 本 正 夫

I

離存形相 *forma separata* とは神でなく、人間でもないところの形而上学的存在である。それは必しも絶対者である訳でないから決して神と云えない。神は実存の現実態、純粹現実態 *actus purus* として唯一独自のもので絶対者に限られる。しかしまた質料的な肉体に、形而下的に自らを表現する人間でもそれはない。人間の形相は質料と合成する限り、純粹ではなく、云はば肉体的精神であるが、しかし肉体が滅して尚靈魂として不滅であると云う意味では可離形相 *forma separabilis* と云われる。しかし今ここで扱おうとする離存形相は始めからこの肉体と縁がなく、従つて可離的であるよりは離存的であり、その内的構成上一切の質料を排除すると云う意味で純粹形相 *forma pura* と呼ばれる。要するに離存形相とは純粹精神実体、純粹理性的実体 *noumenon, noumena, intelligens, intelligentia* の名を以て呼ばれる天使的存在に他ならない。

この様な形而上学的存在を殊更問題とする理由は、一方古代では純粹形相を純粹現実態と区別しえない儘に、これと神とを同一視するか同類化して、純粹形相である神が頂点で能動理性等その他の精神的諸存在がそれから階層的に発出すると説く汎神論的な新プラトン主義が生じたこと、他方近世では離存形相を可離形相と区別しえない儘に、質料と合成した人間の位格性を直ちに肉体と無関係な天使の純粹理性性格と混同し、更に絶対

精神への帰着を要請する意識一般とそれとを区別出来なかつたところにデカルト・カント以後の先験的観念論が生じたこと等、いずれもこの形而上学的存在の扱い方如何に由来していることを考えたからである。否定的にせよ、肯定的にせよ現代人は神と人間とに深い関心をもつていても、この中間的な天使存在を殆んど軽蔑的に度外視している。しかし度外視されただけで理論的、体系的に検討されないものは反つて暗暗裡に先入観として働く余地をのこす。云つてみれば現代人世界観の盲点は自我である。そして自我には精神の役割も神の役割も負はされているのである。曾つてプラトニズムが神と精神とを区別出来なかつた様に、近世観念論は精神と自我とを区別出来なかつた。結局「神と自我」との間に立ちほだかり、誤つて両者を同一視し、一義化する時、その媒介概念となるのはこの「精神」であつて、これが存在論的客観的に正しく取り扱われた場合には離存形相とされるのである。

形而上学を忘却し、これを度外視した現代人は自我を精神であり、神であるとして、それに必要以上の負担を掛けてはいないであろうか。しかし私の肉体的自我が他人のそれと共に人間の名に値いする位格^{ベルツァ}であることを知る為には、少くとも神と精神に関する形而上学が必要である。この最少限度の形而上学が必要のところにもそれなしに済ましたり、その代用品を以て済ませようとして現代人は苦悩している。我々現代人は自分と精神と神との分別も出来なくなつている⁽¹⁾。自我は神と精神の分まで背負いこんでどうにもならなくなつていのではないか。しかし形而上学は神と精神とを私の他者として私から引離してくれるのである⁽²⁾。形而上学は物質を他者として扱う自然学からその原理を獲、存在の類比を通じて神と精神とを理性の要請する客観性に即して認識し、私の自我を余計な重荷から解放し、自負することのない私の自我の真の姿を示してくれるのである。神については既に論じたこともあり⁽³⁾、その上神は形而上学の体系上最後に位するから⁽⁴⁾、本論文では主として精神、即ち、離存形相についての体系理論的な再

検討を扱いたいと思う。

註

- (1) 自分と精神と神とを一元論的に同一視してその間の分別がつかなくなるのは何も形而上学の忘却によるのではなく、反って高度の「形而上学」である古代の新プラトン主義や近世の主観主義的観念論に由来すると考える人もあろうが、私はアリストテリコ・トミズムの自然学に始まる形而上学を真の形而上学と考え新プラトン主義や近世の主観主義的観念論の所謂「形而上学」は逆に反形而上学であると考え。絶対者からの発出論理による天降り式の観念論はインドの自我哲学の流をひく同一哲学的発想で、私の意味する自然学に発する真の形而上学ではない。この様な反形而上学を高度の「形而上学」と呼ぶ近代人の錯誤は客観主義的にして真実の形而上学であるアリストテリコ・トミズムに対する無智乃至は忘却に由来する。そして現代人はこの高度の「形而上学」をも喪失したが、その同一哲学的な発想法の惰性は私の自我に精神乃至神の役割を負はせているのである。しかし現代人がこの高度の「形而上学」、即ち、上述の反形而上学を追放したその科学性はそれが客観主義的なものである限り、アリストテレス形而上学の母胎となつた自然学に該当するもので、私はここに忘却された真実の形而上学復興の機転を掴みうるのではないかと考える。
- (2) 自業自得のこととは云い乍ら、小さな穴に頭を突込んで悶えている我々現代人の苦悩に対して宗教のもつ意味を過少評価してはいない。真の宗教の意味はどのような種類の苦悩にも対処出来るところにある。しかしここで云っている苦悩は殊更形而上学を無視したところから生じた反理性的反道理的なものであるからこの様に云つたまでである。それに真の宗教は客観的な分別、道理の世界と矛盾せず、真の形而上学を自らの神学の先行階程 *praeambula fidei* として容認出来るからである。
- (3) 拙稿「『神の存在証明』についての理論的批判的考察」ソフィア（上智大学編）7巻1号2号参照。
- (4) 形而上学は元来経験的実在論の性格であるから始めから絶対者を前提しない。絶対者は「世界形而上学」から証明さるべきものとして最後の自然神学部門で扱われる

II

離存形相と云う極めて非經驗的な存在者を合理的に割りだそうと試みている質料形相論は実は極めて經驗的な世界に即したところから出発する。そもそも質料原理とか形相原理は植物、動物、人間の相互の本質關聯を説明するのに恰好の概念的な道具で、常識的な言葉で云うと質料は材料、形相は規格とでも云えばよいと思う。つまり植物は生命のない物質を材料とする最低の生命の規格であり、動物は同様に物質を材料にする許りでなく、植物の栄養的な生命をも材料にする感覺的生命の規格である。又人間は物質的無生命、栄養的生命、更に感覺的生命をも材料とする上位の規格を云うので、規格はいつもこう云う下位の材料を基体にして實現する。しかし材料である基体だけでは決して規格の示す本質は實現されないので、その現實化の原因は規格自身に求めなくてはならない。蓋し、材料はどこまでも可能的に規格の示す本質であるに過ぎず、現實的にそれである為には現實的な原因が必要であるからである。⁽¹⁾

つまり基体としての物質は可能的に栄養的生命でありえても、未だ現實的に植物とはならない。可能的に植物である物質が現實的な植物となる為にどうしても栄養的生命の現實態がその規格として要求される。こうして始めて物質の一部が材料として撰択され、それを基体にして植物と云う存在者が成立する。又植物と動物との關係で云うと、栄養的生命を有する植物と云うだけでは現實的に動物でない。しかし感覺的生命と云う現實態の規格があつて始めて可能的に動物でありえた植物的のものも動物の材料になる。つまり植物として現實化する物質の中或るものが、単に植物として許りでなく動物の感覺的生命の規格をも受容する材料として撰択され、これを基体にして動物と云う存在者が成立する。また最後に物質、植物、動物の何れも人間本質の現實態に対しては単に材料として可能態に留まるの

で、物質的無生命の他に更に栄養的生命、感覺的生命をも実現してしまつた動物のものの中からはばその一部が、人間の理性的生命の規格を現実化する材料基体として撰ばれる。しかしそれはそれ自身としては未だ動物でしかありえず、単に可能的に人間であるに過ぎない。それが人間の理性的生命の規格に依つていよいよ現実態となつた時、人間と云う存在者が成立するのである。

以上では規格と材料と云つてきたが、これらを形相と質料と云いかへ、形相を本質の現実態と定義し、質料を本質の可能態と定義する。そうすると上述した植物、動物、人間の各本質は物質に於いてはそれらの可能態でしかないので、物質は植物、動物、人間の何れに対しても質料であると判明する。次に植物では植物の本質が現実態であることは当然で、それは栄養的生命が形相として登場してきたことを物語る。しかし動物、人間の各本質はここでも依然可能態であるから、それらの現実態に対しては植物形相の現実態も質料である以上の何ものでもない。即ち、単に植物存在者として植物以上の何ものでもない場合には勿論栄養的生命の形相の現実態は物質を質料とするこの存在者にとって唯一の現実態であるが、動物乃至人間存在者に於いては植物の形相も物質と同様それら存在者の各形相に対して単に可能的であり、質料の意味しかもちえないと云うのである。例えば、動物と云う存在者ではその本質の現実態は唯々感覺的生命と云う動物の形相によつてのみ与えられるので、植物ではその形相が物質に対して現実態であつたとしても、ここではそれは物質と同様、動物本質の可能態でしかない為完全に質料化されてしまうのである。換言すれば、動物存在の質料の中に植物の形相が含まれていても、それが質料の中にある以上、この存在者での唯一の現実態は感覺生命たる動物形相のみであつて、栄養的生命の植物形相はそれ自身としての現実態を有しえない⁽²⁾。そして植物的な栄養機能が動物に於いて実現するのは、唯一の現実態である感覺的生命形相が質料に含まれた植物形相に、その現実態を伝達附与した限りに於いてのことで

ある。

これと同様のことは人間存在者に於いても起るので、そこでは植物的栄養形相も、動物的感觉形相も、物質と同様完全に質料可能態の中に埋没されており、唯一の現実態は理性的生命の形相でしかない。そしてこの理性的生命の形相現実態のみが質料たる基体に含まれた植物的動物形相に現実態を附与しうるのである。人間の理性的生命が、そしてこれのみがこの様にそれら諸形相に現実態を附与出来たのは、それら諸形相が形相であり乍ら人間に於いては質料の中に埋没し、可能態に留まつていたからこそ可能であつたのである。もとよりその様なことは植物的動物形相に対する理性的形相の特別な形相力に依るもので、我々は先きに同様の形相力を植物的形相に対する動物形相の中に見てきたのである。

これを要するにここに質料と云い、形相と云うのも、全く相対的な性格であると云うことである。物質がそれ自身の形相をもつかもたぬか後に論ずるとして、それは植物、動物、人間の基体として、云はば自分の上にある諸存在者の何れに対しても質料であり、植物は下位にある物質基体に対して形相であるが、上位にある動物・人間に対しては質料となり、基体になる。動物は下位にある物質に対しては勿論のこと、物質に対して形相でありえた植物に対しても、それを質料可能化するだけの優越的な形相力をもつ。しかし更に上位にある人間に対しては質料になり、基体になる。最後に人間は自分の下位にある植物、動物が各自の下位のものに対しては各々形相でありえたにも拘らず、物質をも含めてそれらの一切を悉く自らの質料基体として可能化するだけ、それほど強度の形相性を保有しているのである。

形相は本質の現実態、質料は本質の可能態と定義したが、本質とはものの「何であるか」と云う「である存在」を示すもので、これは「ものがある」と云う「がある存在」、即ち、実存とは区別される。我々が単的に現実態とか可能態と云っている時にはそれは実存の現実態 *actus essendi* 乃

至実存の可能態 *potentia essendi* を意味しているが、本質はこの「がある存在」の在り方、即ち存在様式 *modus essendi sive modi essendi* であつて、これは10個の範疇に區別される。そして形相が本質の現実態と云うときには実はこの10個の範疇の中もつとも優越的に本質的とされる実体の現実態 *actus quoad essentiam sive substantiam* を意味している。又質料が本質の可能態と云うときにも同様にこの10個の範疇の中、実体に関する可能態 *potentia quoad essentiam sive substantiam* を意味している。現実態とは単的に「ものがある」こと、換言すれば、「ものがある」と「ものがない」のうち現実的に「ものがある」が撰ばれ一定したことであり、可能態とは「ものがある」と「ものがない」の両方に跨がり、どちらとも未決で不定のことを云う。これに対して特に形相と云うときはものの「何であるか」、殊に「実体として何であるか」が「実体として何でないか」から撰ばれて現実的に一定していることであり、又質料とはものの「何であるか」、殊に「実体として何であるか」と、「実体として何でないか」とに跨がり、どちらとも未決であり不定であることを意味している。

プラトン主義は形相を重視し、質料を軽んずるところから、形相を実体的とし、質料を偶性的と考えた。しかし質料形相論に依ると形相・質料原理はいづれも存在様式の中で一番重要な実体範疇に関する *in ordine substantiae* のもので、両者は一方が現実態、他方が可能態であつたとしても、その点では全く平等である。本質の中で実体と云うことは、ものの「何であるか」が他の「何であるか」に依らず全くそれ自身に依つて定まつていと云うことである。それ故実体は *ens in se et per se ens* と云はれ、その他の偶性的諸範疇が *ens in alio vel per aliud* であるのと異つてゐる。つまり偶性的なものはその「何であるか」がそれ以外の「何かである」に依つてのみ定まると云うのである。

そこでプラトニストは形相は本質の現実態でその「何であるか」が既にそれ自身で定まつているから実体と認めてもよいが、質料は本質の可能

態でその「何であるか」は不定である、それが一定となる為にはどうしても質料でない他の原理たる形相を必要とするから、それ自身だけでその「何であるか」が定まらず、どうしても他の「何であるか」の助力を必要とする点で偶性範疇のものであると考えたのである。しかしこれは実体・偶性の両範疇の次元と形相・質料の両原理の次元とを混同したことから生じた謬論である。「何であるか」と云うことが自分自身だけで、自己關聯的にのみきまることが実体であり、「何であるか」と云うことが他によつて、他者關聯的にきまることが偶性である。ところが形相・質料では範疇の場合の様に単に「何であるか」ではなく、「自己關聯的に何であるか」、即ち、実体が現実態として一定であるか、或いは、実体が可能態として不定であるかが問題なのである。質料に於いて不定であると云つてもそれは既に実体が不定であることであつて、単に「何であるか」(本質一般)が不定であるのではない。強いて「何であるか」と云う言葉を使えば「実体的に何であるか」(実体本質)⁽⁸⁾が不定であると云うべきである。

よく絶対値とか相対値とか云うが、前者は性格的に実体に通じ、後者は性格的に偶性に通じる。それでこのことは絶対値が一定である、絶対値が不定であると云うことと何ら變つた云い廻しでなく、相対値が一定である相対値が不定であると云うことと並行して何の変哲もない。偶性規定に関して一定とか不定とか云える様に、実体規定に関しても同様のことが云えるのは当然である。従つて質料と形相とは決して範疇の異つた偶性と実体とに跨がらず、兩者共に実体範疇の次元の中 *in ordine substantiae* にあり、質料は「実体」の可能態として、同様に「実体」の現実態である形相と合成し、「実体」としての存在者たる本性 *natura* を形成するに到るのである。

さて実体的規定に関して現実態である形相は本性に実体の一定性を附与し、実体的規定に関して可能態である質料は本性基体に於ける実体の不定性の根拠となる。質料は実体的規定を受容するもの故、それ自身としては

実体的に可能態であり、不定である。これに対して形相は実体的規定を附与するものであり、実体的に現実態であるから、それ自身実体として一定である。この意味で附与原理としての形相は積極的で、受容原理たる質料は消極的であるとされる。しかしそれ自身実体的に一定である形相も、それ自身実体的に不定である質料と合成すると、今度は附与原理たる形相の一定性が逆に影響を受けない訳のものでもない。質料との合成に依つて形相が本性化すると基体に関して一定の振幅をもつた相反方向の動揺が許容される。つまり形相の一定性は「一者に依る規定」*determinatio* であつたが、「二者に依る規定」としての *limitatio* が質料的基体によつて齎せられる⁽⁴⁾。形相と質料との合成実体の形相は元来は合成実体の部分として規定の一定性のみを有しているにしても、それは本性的に合成することに依つて合成実体全体の一定性となり、もはや単なる部分としての形相でなく、質料をも含めた全体の形相 *forma totius* となる。そしてこの合成者全体の形相は既に質料の刻印を有するものとして一種の不定性を内含し、云はば、一定の範囲の中で矛盾相反する動揺を許容すると云う意味での一定性を實現する。つまり単的な一定性 *determinatio* が質料の不定性に条件付けられて不定の一定性、第二義的な一定性としての *limitatio* を現出する。合成に依つて生ずる自然乃至本性 *natura* とはこの様な動的なもので、質料原理は正にこの点で積極的な役割を果すのである。

形相原理は上位から下位に向つての規定附与の原理として積極的であり、質料原理はこの点に関しては消極的であるとしても、この同じ質料原理が下位から上位に向つて矛盾相反を許容するその基体性によつて、形相の単的一定性を云はば多義化し、不定化する限り寧ろ積極的であり、形相はこの点では消極的である。つまり質料が下位から上位に向つて条件付けるところの制限原理である限りは、条件付けられたり、制限されたりする形相は受容的になる。この意味で上位から下位に向つての形相の規定附与の積極性のみを看て、質料に何の手答えのない消極性しか認めないプラ

トニストの觀念論に到底賛同出来ないので、我々は下位から上位に向う制限附与の原理としての質料の積極性、そしてその限り制限を蒙る形相の側の消極性を大いに強調したい。しかしまたこの質料原理の制限的積極性を規定的積極性ととりちがえて、形相的現実態の規定附与性を輕視するに至ったストア学派の唯物論に賛同する訳もないことは勿論である。形相と質料の兩原理のもつ本質現実態と本質可能態の差別をあくまで追求するとしても、兩原理の何れか一方を重視したり、他方を輕視したりする依怙鼠眉は存在論の理論からみて断じて与しえない立場である。

註

- (1) 現実的のものは可能的なものを^{イムブリケート}内含するが、可能的のものは現実的のものを内含しない。従つてもし可能的なものだけから、現実的な何らかの原因なしに現実的なものが出てくるとすれば、無から有が生じたことになる。
- (2) トミズムでは各存在者の実体的形相は一つであつて、質料は一切の形相を欠除した純粹質料と考える。従つて動物を例にとると、その実体的形相である感覺的生命は物質性とか栄養的生命等の下位の形相に該当するものを自らの特性として形相自身の中に内属せしめている。それに対して下位の諸形相を可能態化して質料の中に含有せしめ、最上位の形相のみを唯一の現実態とするこの論文で採用したストア的考えの方が一層經驗に適合していると考え。後に述べる様に質料は制限し、条件付ける原理であるとする、上位の感覺的生命の規定乃至實現は常に下位の物質性や、栄養性に制限せられ、条件付けられることになり、存在者の上下の階層關係が一層よく説明出来る。又純粹質料のみを質料基体とする狭義のトミズムに依ると動物が滅失して物質が残るとき感覺的生命が基体から離れると同時に基体は物質の形相を新たにとらなくてはならないことになるが、それはこう云う場合毎に物質が創造されることと同等のことで、その他にこのことの必然性を説明するものがないのである。これに対してこの論文での考え方に依ると下位の形相が既に質料の中に可能態として潜在しているならば、それらを可能態にするくらい形相力の強い上位の形相が除去されれば、下位の形相が現実態に戻るのが当然である。従つて動物が死ぬこと、即ち、上位の感覺的生命と栄養的生命とが除去されると既に質料の中にあつた下位の物質形相が当然現実態化することになつて、実体的形相の轉換推移が極めて自然に説明されるのである。

- (3) 「何であるか」の規定が不定であると云える様に、「自己自身で何であるか」の規定、即ち、「何であるか」が自分自身できまづていることについての不定性を云々することが出来るのである。
- (4) ピタゴラス以来この種の規定が区別される。前者は寄数の原理で、云わば1つの点で直線上の位置を一挙に定めることに該当し、後者は偶数の原理で位置を定めるのに直線上の2つの点を次第に近付ることによって定め様とする。2つの点の間には何らかの距離があるので、その限度内で位置の不定乃至振動が許容される。前者を規定 Bestimmung と云えば後者は制限乃至条件付け Bedingung と云い直すことも出来よう。

III

我々の経験の範囲では形相と質料の両原理は相対的で、下位の存在者は上位の存在者に対していつでも質料的な意味をもち、上位の存在者は下位の存在者に対していつでも形相的な意味をもっている。下位の存在者は直接上位の存在者に対して質料的である許りでなく上位の凡べての存在者に対して同様であり、又上位の存在者は直接下位のそれに対して形相的である許りでなく、凡べての下位の存在者に対して形相的である。この様にして物質である砵物、植物、動物、人間の存在者各層を考察すると、先づ植物は下位の現実態に於ける存在者たる物質乃至砵物を自らの質料として可能態に移行せしめるに足るだけの形相力をもつ栄養的生命を形相原理としてもっており、この原理の規定性の下に本性化する。しかし同時にそれは物質乃至砵物を質料原理としている以上、栄養的生命の規定力が如何に独自のものであつても、植物が物質の条件付乃至制約の中にあることは争はれない。植物は物質の類の中に生じた通常の種差ではないところの独自のものではあつても、この類がその制約原理にはなるのである。

同様に動物は直接下位に現実態として存在する栄養的生命の一部を可能態に移行せしめ自らの質料にするだけの形相力をもつ感覺的生命を形相原理としてもっているが、それにも拘らず質料原理たる植物性、更にその

また質料であるところの物質性によつて条件付けられ制約されていることも確かである。ここでも感覺的生命は植物の類の通常の種差とはことなつた独自の種差規定ではあるが、それは依然として類的制約の下にある。最後に人間の理性的生命の形相はその直接下位にあつて現実態であるところの感覺的生命の形相をも自らの質料として可能態に移行せしめうる独自の形相力を有ち、それに依つて人間本性が規定されるが、感覺的生命たる動物性を質料とし、更に下位にある植物性、また物質性をも質料とする限り、そのいずれのものにも制約され、条件付けられていることは勿論である。動物の通常の種差に対しては動物の類は一義的な規定力を持ち、従つて各種の動物は一義的に動物であるが、理性的生命と云う独自の種差に対しては、動物と云う類、従つて植物、磁物と云う類は唯々、制約力をもつのみである。従つて人間が一義的に動物であつたり、植物であつたり、物質であつたりすることはなく、唯々類比的にのみその様に云えるだけである。総じて類は通常の種差に対して一義的規定力を持ちうるとしても、上位の形相を示す独自の種差に対しては唯々二義的（多義的）な規定としての条件性しかもちえない。上位形相の示す種差に対して下位質料の示す類は制約的であり、類的規定ではなく、類比的規定性しか有してないのである。

植物、動物、人間の各領域について質料・形相論は我々の経験の解明に相当有効であつたにしても、これら三領域の共通の質料的類である物質についてそれは無効であるどころか反つて有害であるとさえ言はれている。それはアリストテレス自然学がガリレイ等の実験観測学と対決した思想的な経緯を別として⁽¹⁾、物質の実体とは何かと云う問題をいつも次々に発見される元素、分子、原子、素粒子等の物質現象追求の問題とすりかえているところから起つた当然の結果である。アリストテレス自然学は元来アトミズムをエネルゲティズムと同様に物質の実体解明でなく、物質の現象解明の手段と考へていたにも拘らず、近世のアトミズム仮設の成功に幻惑され

て、それを物質の実体解明と取り違え、最新の発見にかかる「アトム」をいつも質料・形相の両原理で解釈することに浮身をやつしてきた。しかし物質的自然をアトミズムに従い「アトム」乃至粒子とみることが出来るとすれば、同様にそれをエネルギーティズムに従い、「場」乃至波動とみることも出来るのであつて、この両者は物質現象の両面以外の何ものも示さないのである。物質の実体とは何かと云う質問には正に物質の、それ自身に於ける、それ自身に依る存在、その自己關聯的な本質を以て答えるべきであつて、物質現象の特定の側面であるアトムとか場、粒子とか波動等でその答を出そうと考えたり、ましてそれらの現象解明に有効とされた最新発見の仮設を慌てて質料・形相論の立場から再解釈したりする、そう云うことはアリストテレス質料・形相論の不毛を自ら晒けだし、その声価をますます軽からしめただけであつた。

しかし形而上学としての自然学は先づ物質の実体を解明するもので、それは実体本質に関する質料・形相の原理のみに依つて解明され、何か他の原理、形而上学の言葉で云えば現象乃至偶性本質に関する機動因の原理等で発見されるものでない。アトミズムにせよ、エネルギーティズムにせよ、現代自然学での有効な仮設はいづれもこの機動因の原理に基く機械論メカニズムに依つて発見されたので、この様に質料・形相原理以外の他の原理で発見されたもの、つまり質料・形相原理なしで充分発見出来たものに改めて質料・形相原理を適用すること、それは気休め以外には効力をもちえない不生産的な解釈に過ぎない。質料・形相論が植物、動物、人間等の生命の階序を説明するのに都合がよくても無機的な物質世界に対してナンセンスであると云われる所以である。アトミズムやエネルギーティズムは現代の物質的世界像の形成に有効であり、相互に競合している。確かに物質現象の解明にこの2つの立場の何れかに拠る仮設が極めて有効であつたのは事実であり、その結果、人々の目に物質の実体がこの2つの相反的な立場の何れかに依つて解明されるであろうとの仮象を惹き起し、それがもともと物質の実体

解明の役割を自任していたアリストテレス質料・形相論に焦燥の気持を抱かせたと云うのも事実であろう。

しかし物質の実体を解明するのは実体範疇に関わる質料・形相の両原理のみよくしうるもので、偶性範疇に関わる機動因の原理は現象の解明には大いに実績をあげることが出来ても結局それはそれだけに留まる。物質の実体とは物質そのもので、物質現象は物質の側面である。前者を物質全体とすれば、後者は物質の部分である⁽²⁾。アトミズムやエネルギーイズムが物質の部分の解明にどれだけ実効をあげたとしても、全体の解明には限度がある。物質の現象解明の為に名乗りをあげたものが、そこで実績をあげたからと云って途中で物質の実体解明へと鞍がえする訳にはゆかない。現代物理学はアトミズムに由来する物質の粒子像とエネルギーイズムに由来する物質の波動像との何れかに軍配を上げるのでなく、不確定性関係に基いて相反する両物質像の相補性を主張している。粒子・波動の物質像だけでは実体の解明にはならない。相反する両物質現象像を統一する不確定性関係そのものはその何れかの現象像をもつても割切れない。それは現象でなく、物質そのものに帰せられる実体法則である。私は現代物理学が物質そのものに帰した不確定関係の不可謬をここで主張しているのではない。私が云いたいのは現象解明に出発する対象学は常に対象そのもの、対象の実体を問題とするところまで必ず行きつくものだと云うことである。そして物質そのものたるその実体性に関して質料・形相論の再び注目さるべき時が来たと云へるのである。

質料・形相論に依る物質実体の解明が現代の物理学的状态によつて新しい意味を獲得するにしても、それは現象解明の様々の仮設から演繹されてくるのでなく、全く質料・形相論自体の内在的論理の方から演繹されてこなくてはならない。少くとも生命をも含んだ自然に関する我々の経験が質料・形相論に最少限度の信憑性を与えたのであるが、その様な質料・形相論の中には既に各種生命の共通の質料基体として物質の類が前提されてい

る。そして物質の現象的部分の解明の方向からでなく、質料・形相論の内在的論理に立つて物質を解明して始めて物質と他の生命的諸領域との関聯が明らかになる。蓋し、物質の実体、物質そのもの、従つて物質の全体を明らかに出来ると、始めて類としての物質を超えて他の諸領域に踏みこみ、それとの関聯を問題に出来るからである。物質現象と他の存在領域の特有現象との関聯を論じる前に、物質実体と他の存在領域の実体との実体的独立を前提した上での構造的関聯が論理的に先行しているのである。このような構造的関聯は物質を現象に於いてでなく、実体範疇に於いて解明する時、換言すれば、物質を部分に於いてでなく、全体として解明する時、始めて問題に出来るのである。物質の実体学である自然学はもともとこの様な形而上学の一部としてのみ成立出来たのであつて、それが単に自然学のみにとどまろうとした時、⁽³⁾その実体学としての内実を失い、従つて物質全体を扱うことも、更に進んで生命を含んだ自然全体を対象とする権利をも放棄したのであつた。

さて本来の質料・形相論にかえつて、その内在的論理の立場から物質を何と考えるかを問題にしよう。上述した植物・動物・人間の实体関聯は経験上一応納得出来るところの質料・形相論の範囲に止まつたが、下位の植物から上位の人間に向つて各実体に於ける唯一の現実態は次第に重疊する形相の最上位にして最後の形相に移行するが、これに対してはそれまでの、或いはそれ以下の形相は凡べて可能態である。質料に対して形相であり、従つてその限りでは既に現実態であつたものが、上位形相との本性的合成に於いては単に可能態であり質料の側に留まると云うことは、下位形相の現実態を克服する上位形相の優越的形相性を如実に示している。この意味で存在者各層は下位から上位に赴くに従つて一層形相的になる、換言すれば、形相原理にそれだけ多く比重が掛る。他方、上位の人間から下位の植物に向つて各実体はいづれも可能態としての質料を含んでいるが、その質料は下位に赴くに従つて次第に基体性を増してくる。上位の形相に対

する質料にはその形相の欠除によつて自らの現実態を回復するか、或いは新たに現実態を獲得することによつて上位の形相を欠除せしめるところの、相対的に下位の諸形相が含まれており、その基体性には一貫性がない。しかし上位の人間から下位の植物に下降するに従い、その質料の中に重畳する下位形相の数は次第に減少し、質料の基体性はそれだけ一貫した安定性を保つ様になる。つまり存在者各層は上位から下位に赴くに従つてより一層質料的になり、それだけ質料原理の比重が増大するのである。さて問題の物質は質料・形相論からどの様に規定さるべきか。人間、動物、植物と上位から下位に向う方向の線上に物質があるので、それが最下位の植物より一層質料的であることは当然である。物質は単に植物の質料である許りでなく、動物、人間の質料としてもつとも安定した基体性を有っている。今まで物質の実体として、元素、分子、原子、素粒子等の現象的なものが次々に候補者にあがつたが、それらは何れもナンセンスで、そこで形相と思われたものは実は実体的形相 *forma substantialis* でなく、単に偶性範疇に於いてある形態 *figura*、不適當な名辭乍ら偶性的形相 *forma accidentalis* でしかなかつたのである。確かに偶性的形相であるならば、物質現象の基本的なものとしてそれはそれなりにまた探求の価値がある。しかし今までの探究で多少形相的と思われたものは、そして多くの人がこれこそ実体であると眩想したものは、いづれも他のものから機械論的に導出出来る偶性的のものでしかなかつたのである。そしてその上、經驗的立場から常識化した質料・形相論からみると、植物より下位にある物質は我々の知っているものの中ではもつとも質料的であつて、このもつとも質料的な基体で見出される実体形相とおぼしきものが上述した様にいづれも偶性的形相でしかなかつたのであるから、ここから形相を実体とし質料を偶性としたプラトニストと丁度正反対の唯物論的見解、即ち、質料的基体のみを実体とし、一切の形相を偶性的とする見解が近代自然科学者の間に普及するに到つた。

しかし真面目に形相とか質料とか云うならばもともと質料・形相論の立場からみてこの様なことはありえない。質料も形相も共に実体範疇を前提した上での可能態、現実態の原理であることは上述したところから明らかである。唯、上位から下位に赴くに従つて存在者各層が次第に質料的になり、最下層の質料的基体は恐らく一切の形相を欠除した純粹質料ではなからうか。そして物質も亦この様なものとしての実体ではなからうかと云うことは検討に値いする。つまり質料・形相の段階構成をもつとも質料的な方向に押しつめてそこに物質の実体を見出そうとすること自体は健全な行き方である。しかし物質と云う実在的な実体存在者がその様なもつとも質料的な基体であるにしても、それが果して純粹質料であるかどうかには大いに問題がある。

- 註(1) 中世のアヴェロイズムはアリストテレス自然学を紹介したのとして当初懸新なものであつたが、ガリレイ等に始まる近世の実験観測学に対しては頑強な保守反動となつた。前者が質料・形相論に基いたのに対し、後者は始祖ロージャー・ベーコンにみられる如く、反つて新プラトンの「光りの形而上学」を背景にしたり、或いはエピクロス的なアトミズムを背景にしていた。この実験観測学が成功するにつけ、アリストテレス自然学は惨めな状態に陥つた。エピクロスの軍門に降つた積りはなくても、アトミズムを質料・形相論で解釈出来ると考えたり、種々無駄な努力をした揚句、無機的自然界に関する限り質料・形相論は無用であるとの結論に達した現代スコラ学者も出た程である。
- (2) 物質の実体を物質の全体とみ、物質の現象を物質の部分とみたてたのは、物質現象の、即ち、何らかの側面の立場に立つと決して物質の完結的全体を把むことが出来ない、換言すれば、把むものは物質現象の任意の部分、或ひはその集積でしかなく、現象全体をも完結的には把めないこと、従つて「物質そのもの」の実体的立場にたつてしか完結的に全体を把める方法がないと云う理由によつてである。これは世界に始めがあるか始めがないかと云うことが継起的な現象の立場に立つ限り解決出来ないことと共通の問題性格である。
- (3) 自然学が形而上学に進まず、唯物論的、実証論的に自然学に止まろうとした

時、それは反つて物質の全体を扱えなくなり、その任意の部分である現象を扱う現象学となつて、実体学たる資格を抛棄した。そして近代自然科学で無言の中に前提されている自然哲学は実はこの様な自然学に止まろうとする自然学であつた。

- (4) 形相と質料は実体範疇の次元にあるから偶性範疇の次元で形相を呼ぶことは不適當である。しかし実体面ではなく、現象面での一定性たる形姿乃至形態 *figura* は不適當乍ら習慣上偶性的形相 *forma accidentalis* と呼ばれることが多い。
- (5) 本文7頁。

IV

形相原理は実体の現実態であり、質料原理は実体の可能態である。今上位から下位に向つて極限の場合を考えると、それは最も質料的で形相の皆無な純粹質料であろう。我々は質料を被規定原理として頭の中だけで考えた時には形相を一切捨象した純粹質料を認めない訳のものでない。しかしそれは存在者の原理であつても、存在者ではない。ところが物質は存在者なのである。この様な存在者が一切の形相を欠除した純粹質料であることは到底認められない。何となれば、質料だけであると云うことはその実体的規定性が純粹に可能的でしかないことであり、それは「実体的に何か」と云うことが決して現実的に何かでないこと、換言すれば、「実体的に何でもない」ことを意味しているからである。存在者は現実態に於いて「実体的に何か」であつてこそ存在者たりうるので、「実体的に何でもない」存在者はないのである。勿論「実体的に何か」と云うことは第一の、最重要な範疇で、それは第一の「存在の様式」であり最優越の本質に違いないが、それに実存を与える何らかの機動因、或いは目的因なしに存在者となる訳のものでない。存在者成立の充分条件には確かに本質外のこれらの原因が必要である。しかし「実体的に何か」と云う第一本質は存在者成立の不可欠条件で、これの現実態なしに、云わば、現実的に「何でもない」も

のが存在者であり得よう筈もないのである。そこで質料的基体が最下位乍ら矢張り領域的な存在者である以上、それは決して純粹に質料だけのものではなく、必ず形相との合成を要求する。しかもそれは最も質料的でなくてはならないことは確かであるから、形相的であるにしても、最少限度に形相的であらねばならない。換言すれば、「実体的に何であるか」と云うことの現実態が最少限度であるところの存在者でなくてはならない。

質料と云う実体の可能態が単に被規定原理として頭の中にあるだけならばよいが、それが幾多の形相から実体規定の現実態を實際に受容する基体として、それ自身は未だ受容する実体規定に関して不定であると云うときでも、それは何時の間にか基体として既に存在者であり、それ故にこそ受容に先立つて「それ自身」としての一種の実体的現実態をもつていなくてはならないのである。質料的基体としての物質が一切の上位の存在者に対して質料である為には、それ自身少くとも質料であることの現実態を保有しており、そしてその限りそれは基体としての存在者でなくてはならない。質料的基体は質料たる存在者であり、正に質料の「自己の形相」によつて現実態たる存在者である。最少限度の現実態、最少限度の形相とは質料の正に自分自身たる自己の形相のみを云うので、それ以上の何ものでもない。それは質料的基体に本来的に内在する最少限度の自己の形相であつて、こう云うものこそ固有の意味で質料的形相 *forma materialis* と呼ぶにふさわしい⁽¹⁾。つまり質料と質料の自己の形相との本性的合成から最下位の存在者が成立し、これを物質乃至根本物質と呼ぶ。アリストテレス自然学で従来物質的実体と看做されてきたアトミズム乃至エネルゲティズムの凡べての形像は結局実体たるこの根本物質に対して単に現象的な偶性形相乃至現象形態 *figura* を示すに過ぎないのである。

そもそも「実体的何か」の可能態である質料は実体的規定に関して不定であり、それは結局「Aであること」と「非Aであること」とのどちらとも一定しないこと、従つて質料の中には「Aであること」と「非Aである

こと」と云う矛盾したものが同居していることの謂いである。勿論、「Aであること」と「非Aであること」との両方が現実態であるならば、それは単なる矛盾撞著であるが、幸い質料と云う純粹可能態に於ける両者の共存、即ち、「Aでありうること」と「非Aでありうること」の共存であるから矛盾撞著は免れうると一般に考えられている。しかし上述した様に質料的基体は最少限度の形相を有する存在者であり、その実体規定には最少限度の現実態が要求されるとなると、質料の不定性が包含する「Aであること」と「非Aであること」との矛盾が生き返ってくる。しかし要求される現実態は最少限度の現実態であつて最大限度の現実態ではないから、決して上述した意味での単なる矛盾撞著がそのまま生き返ってくる筈はない。蓋し、ここで現実態を要求しているのはもともと質料的形相であつたからで、何も形相的形相が要求しているのではない。言葉の語呂で形相的形相と云つたが、仮りにこう云うものが要求したとすればそれこそ最大の現実態以外のものを要求しなかつたであろうし、第一そこには一切の質料が欠除している為、専ら「Aであることだけ」が最大の現実態であつて、それに矛盾する「非Aであること」は一切排除され、従つて完全に無矛盾でもあつたであろう。

ところが質料的形相ではその質料性の為、「Aであること」の他に「非Aであること」が含まれ、しかもその形相性の故に矛盾した両者が同時に現実態に於いてあることになる。但し、その形相性は質料の自己の形相として質料に即した最少限度の形相性である為、矛盾した両者が同時に現実態であるとしても、両者の各々が同時に最大限の現実態を要求するものでない。少くとも何らかの実体的規定が成立するに充分の最大限の現実態が必要であるのは確かであるが、それは「Aであること」の実体的規定の最大限の現実態と「非Aであること」の実体的規定の最大限の現実態とが両立する様なことでは決してない。もしそうであるとすれば、それは上述した矛盾撞著の場合で、成程この場合には現実態は少くとも何らかの実体規

定が成立する為に必要な最大限の現実態の丁度二倍もの現実態であることになる。即ち、Aであることの最大限の現実態と非Aであることの最大限の現実態との二つである。ところが最少限度の形相が要求する現実態は何らかの実体的規定が成立するに足る最大限の現実態を超えることがないのであつて、それは丁度右に述べた二倍の現実態の半分で足り、この範囲の中で現実態が矛盾する「Aであること」と「非Aであること」とに分配されなくてはならないのである。これは実体的に「Aであること」と実体的に「非Aであること」との、両者がそれに於いて矛盾するところの現実態の最少限の場合であり、正に実体Aと実体非Aとが生滅交替する場合に該当する。

「Aであること」の実体的規定が最大限の現実態である場合には「非Aであること」の実体的規定は最少限の現実態に於いてあり、「Aであること」の実体的規定が中間的現実態の時には「非Aであること」の実体的規定も中間的現実態であり、更に「Aであること」の実体的規定の現実態が最少限となる場合には「非Aであること」の実体的規定は最大限となる。こうして両実体的規定の現実態の和は常に何らかの実体的規定が成立する為に充分である最大限の現実態を越えることはない。しかも大小の差はあつても矛盾する両実体規定が共に何らかの現実態に於いてあることは確かであるから、矛盾は確かに実在する。A実体が充満的に現実的である時に既に矛盾する非A実体が生成し始め、非A実体の生成が進行することは矛盾するA実体がそれだけ滅失することを意味し、最後に非A実体が充満的に現実的である時、一たび滅失した矛盾するA実体が再び生成し始める。つまりAは非Aと実体的に交替し、そこから更に非AはAと実体的に交替する。A実体の滅失は同時に矛盾する非A実体の生成であり、非A実体の滅失は同時に矛盾するA実体の生成であつて、一般に生成を「上り坂」と云い、滅失を「下り坂」と云えば、正にヘラクレイトスの云う通り「上り坂」と「下り坂」とは同一である。又一者の滅生は他者の生滅であり、

他者の滅生は一者の生滅であるとするアリストテレス自然学の実体変化 *alteratio substantialis* もこの質料的形相と合成する最下位の質料的基体に於いては全く必然のことと論証されるのである。以上考察してきた質料的形相観からみて、一般に質料的基体を構成要素とする一切の合成実体がこの様な本質転換の弁証法を内含し、常に何らかの実体変化に曝されているのも不思議でない。質料的基体はその質料的形相性故に、常に「それではないもの」に転化する「それである」ところの実体的存在者なのである。

形相・質料原理の段階をこの様に質料化の方向に極性化して獲得した質料的基体の形而上学的性格はそのまま物質の実体性格として我々の経験する物質現象の背景になる。徹底した質料性格を示し乍ら、しかも頭の中だけにある単なる原理性格に止まらず、存在者として実在基礎領域を形成するのであるから、どうしても質料はそれの自己形相をもたなくてはならぬ。そこでは実体的規定の不定（質料）が正に一定（形相）しているのである。不定（可能態）を一定化（現実態化）する最少限度の現実態はなくてはならないので、これは論理的矛盾の中でどうしても実在化せざるを得ない不可避の部分であると云えよう。そして連続的で無矛盾な現象変化の根底に予想される断絶的な実体の本質変化はここから始まるのである。一切の現象変化を荷う実体自身の矛盾的交替は現象変化に対して劃期的な時代区分を設定する。そしてこの質料の実在の根底的な動的性格を歴史的と呼んで差支えないと思う。⁽²⁾「不定の一定」であるこの質料的形相を自らの質料の中に合成している一切の合成実体は、上位に赴くに従つてその最後の形相が質料に対する総合的形相力、即ち、一定化の形相力を如何に増大してゆこうとも、⁽³⁾所詮それは「『不定の一定』を内含する一定」であり、「全体の形相」として質料の刻印を受けていることに変わりはないので、何れも例外なく偶性変化のみでなく、本質変化に自らを曝らしている。従つてそれらの実在性格も根底的に歴史的と云わねばならぬ。世界は如何に形相的になろうとも基体の制約を受ける限りどこまでも歴史的であり、発展

的である。⁽⁴⁾

質料・形相論による世界の考察はしかしこれで終つたのではない。質料・形相論の内在的論理に従つて上位から下位への質料化の方向に極性化したこれまでの論議に対して、それと全く同等の権利で下位から上位へ向つて形相化を極性化することが出来る。下位の方向に質料的な基体を求めた結果、最も質料的な実在は少くとも自己の形相との合成を必要とすることが判明したが、今度は上位に向つて最も形相的な実在を求めるとどの様な結果になるか。最も質料的なものは質料だけの純粹質料でありえなかつたが、最も形相的なものも純粹形相でありえないであろうか。

下位の存在者領域から上位の存在者領域に移つてゆくに従い、以前に形相の現実態を有していたものをも可能態として質料の中に包含してしまう様な、新しい形相が出現し、形相の規定力は確実に増大してゆく。しかしその様な形相は質料との本性的合成を経ずには決して存在者とならないので、合成実体の形相が質料なしに存在出来るのは唯々原理乃至イデアとして頭の中にある時だけである。ところが質料的基体と本性的に合成することはどうしても形相の規定力を条件付け、制約することになる。従つて形相の規定力が最大になるためにはどうしても質料との本性的合成を経ずに存在者である様な形相がなくてはならないのである。最早、本性的に基体を求めない、従つて基体的制約を完全に免れた形相にこそ実は最大の形相力を見出しうるので、それは存在者であつて、しかも本性的に一切の質料を含まない純粹形相に他ならない。最大の形相力の故に純粹形相は、上位に赴くに従つて次第に形相力を増大してゆく如何なる合成的形相よりも一層上位にあり、完全に基体なしに形相だけで克く存在者たりうる場所の離存形相でなくてはならないのである。

しかし果してこの様な純粹形相が存在者として成立するであろうか。純粹質料が存在者として成立しなかつた上述の理由と之とを比較してみよう。繰返して云うと一切の形相を欠除した質料は純粹可能態であり、それ

の「実体的に何であるか」は全く不定であつた。つまりそれは現実態に於いて「何でもない」から、存在者であることの不可欠条件を全く欠いていたのである。ところがこれに比べて純粹形相は実体的規定に関して純粹に現実態であり、「実体的に何であるか」は全く一定である。従つて現実態に於いて「何か」である存在者の適格を完全に保持している。勿論この条件だけで純粹形相が実存するのではなく、実存する為にはこれを実存せしめる機動因乃至目的因がその第一原因（充分条件）として必要であることは云うまでもない。しかしその為の不可欠条件である「実体的に何か」であるところの本質の現実態については純粹質料とは違つて完全に適格である。こう云う訳で純粹形相は規定原理として他に自らの実体的規定性を附与するだけでなく、この様に附与出来る為にもそれ自身現実態に於いて実体的に一定であるところの立派な存在者である。質料化の方向に極性化して最も質料的なものが存在者である為にそれは少くとも自己の形相を必要としたが、同様に形相化の方向に極性化して最も形相的なものは質料なしに純粹に形相だけで存在者であると云うこと、存在者の原理としてなら質料だけであつたり形相だけであつたり出来ても、存在者として質料は形相との合成なしには成立せず、これに対して形相は質料なしにも成立すると云う、この非対称^{アシムメトリア}は重要である。これは質料の原理に対する形相原理への依怙^{アシムメトリア}ではなく、本質の現実態なり、可能態なりを純粹に理論的に考察した結果生じた帰結なのである。

純粹形相は純粹質料と異なり充分な原因さえあればそれだけで実体的存在者として成立することが判明した。最も形相力あるものが質料基体による制約を蒙らないもの、従つて基体なき存在者でなくてはならないことは判つていたが、その様な質料なき形相としての純粹形相が純粹質料とは異なつて立派に存在者として成立することが認められたのである。そこでこの存在者としての純粹形相の有つ最大の形相力乃至形相原理の規定性が如何なるものであるかを瞥見しよう。通常、規定原理は質料との本性的合成

に向うものであり、相対的に形相力が強いと云うことは他の場合には現実態であつた形相をも可能態にして、現実態と可能態との本性的合成を成就することであつたが、この様な場合には規定する形相も必ず制約を蒙つて形相力の最大は期待出来ないのである。そこで最大の形相力は決して本性的合成に与らず、従つてその様な形相力をもつ純粹形相も決して単なる基体を要求しない。純粹形相が規定原理として規定するものはそれ故質料的な基体でなく、現実態に於いてある実体存在者なのである。純粹形相がそれの「何であるか」性を附与するのは既に現実態に於いて実現している「何であるか」にであつて、もはや可能態にある質料基体にはない。質料的な可能態にある「何であるか」に現実態にある形相の「何であるか」が附与された時に本性的合成が成立したが、この場合には既に現実態にある「何であるか」に現実態にある「何であるか」が附与されたことになるので、恰も屋上屋を架する様にも思える。しかし形相の規定性が質料の基体的制約を蒙らない、即ち、最大の形相力が対象を規定し乍らも対象によつて制約されないで完全に自らを保持出来ると云うのもこうであつてこそである。

抑々現実態にある「何であるか」の一定性は既に一切の実体的存在者に例外なく保有されており、最下位の基体たる質料的形相、全合成実体の「全体の形相」たる不可離形相並びに可離形相、又最上位の離存的な純粹形相を通じて全存在対象に及ぶのである。そして最大の形相力が既に現実態に於いて「何であるか」であるこれらのものに更に現実態に於ける「何であるか」を附与するとは、実はこれら一切の存在対象に「何であるか」の可智性の規定性を附与する謂いである。一切の存在対象は既に存在者として即自的、本性的に成立し、その限りに於いて現実態であるが、この現実態に更に可智性の現実態が附与されることに依つて存在対象は対自的、適性的なものになる。そしてこれが能動理性の自然的光りと云われるものであり、この現実態附与は既に本性的に現実態であるものに対する^{ハビトゥス}適性の附

与に他ならない。本性的な「在ることの様式」modus essendi に適性的な「知ることの様式」modus intelligendi が附加されて、物自体は「知られる」と云う適性を獲得する。つまり純粹形相の規定作用は正に能動理性の精神作用に他ならないことがここに判明した⁽⁵⁾。

可智性の附与が凡べての存在対象に及ぶ時、この凡べての対象の中には当然純粹形相である自分自身も含まれる。従つて純粹形相たる能動理性は当然自覺的自主的である。通常形相が規定性を専ら可能態にある質料的基体に向わせ、それに制約され、それに依拠するのに対し、純粹形相はその規定性を現実態にある一切の存在者対象に向わせ、それらに可智性を与えても、それらに制約されたり、拘束されず、結局自己自身にも同様の規定性を還歸させ、可智性を附与することが出来るので、この意味で自覺自主的な精神的位格性にこそ純粹形相の特長があると云うべきであろう。蓋し、理性に於ける自己還歸が自覺で、意志に於ける自己還歸が自主である。合成実体では形相の規定性は質料的基体に向い、自己に向わない。質料的基体には質料的形相の他に更に上位の諸形相が可能態として含まれていることもあり、唯一の現実態たる最後の形相規定が可能態にあるこの質料的形相に向う場合と、更に上位にあり、従つてそれだけ自分に近いものであり乍ら、しかも質料として可能態にある上位形相に向う場合とでは些か趣きが異なり、前者では単的直線的な他者規定であつたものが、後者では自己還歸に幾分近い斜めの他者規定になることも一応考えられる。しかし完全な自己還歸の志向は純粹に形相的な精神的実体だけに限られるのである。

このことはしかし実体本質に於ける自己關聯と混同してはならない。ここでは「自己が自己に依つて自己である」と云う本性的、即自的な自己關聯が問題であつて、この様な存在様式である実体本質は、存在者である限りどの存在領域に於いても、最も質料的のものから最も形相的なものに到るまで、類比的乍ら等しく客觀的に完全に成立しているものなのである。

ところが純粹形相の規定性が自己還帰すると云うのは、本性的、即自的な次元の上述した自己關聯とは違つて、可智性の^{ハビトゥス}適性に於ける自己關聯である。即自的なものが「自己が自己自身で自己である」のに対し、それは「自己が自己自身で自己と知られる」(自覚)、「自己が自己自身で自己と措定される」(自主)と云う対自的な次元での自己關聯である。

又次の様な反論も考えられよう。純粹形相が自己を自己として規定するとき、自己自身が被規定原理となるので、その限りではそれは質料的でもあり、可能態でもある。それ故最上位の純粹形相と云つてもそこに何らかの質料性が介在していやしないか。そしてそれは最下位の質料的なものが質料的形相と云う形相性なしではなかつたのと丁度^{シムメトリア}対称的であると。しかし繰返す様であるが、最下位の存在者で質料が形相なしに存在しないのに、最上位の存在者では形相が質料なしに存在すると云うかの^{アシムメトリア}非対称は実は純粹に理論的なものであつたのである。質料は一般に規定されるものであるが、それが質料外の他者である形相と合成する場合、云わば他者によつて規定される、しかし質料化の方向に極性化すると質料は遂に外から附与されたものによつてでなく、それに固有な自己の形相に依つて規定される。又形相は一般に規定するものであるが、それが形相以外の他者たる基体と合成する場合に、云わば他者を規定する、しかし形相化の方向に極性化すると形相は遂に自己を規定する様にもなる。兩者何れの場合でも極性化を通じて「自己」の問題が登場する点で相似であるが、実はそこに重大な相違があつて、それが非対称を結果するのである。

即ち、極端な質料化の場合には質料は自己の形相に依つて規定されるので、決して自己によつて規定されない。何故なら質料は可能態である限り、決して現實態に於ける自己ではない。しかるに質料が規定されるためにはどうしても現實態に於ける何ものか、そしてこの場合、特に現實態に於ける自己が必要であるから、単に質料の自己ではなく、質料の自己の形相に依つて規定されなくてはならないのである。これに対し、極端な形相

化の場合には形相は自己を規定するので、決して質料的基体としての自己を規定するのではない。何となればここで規定される自己は既に形相として現実態であり、それは質料的基体の可能態以上のものであるから。成程、形相的自己を規定する時でもそこには名目的に被規定性があり、基体的可能態を頭の中だけで考えることは出来るのであるが、しかし実質的実在的には無意味である。何となれば、可能態にある自己は現実態にある自己を内含前提しないから、その場合には前者だけで後者を代表できないが、しかし逆に現実態にある自己は既に可能態にある自己を内含前提しているから、前者だけで充分後者を代表でき、従つて前者に当る現実態の形相的自己は後者に当る名目的質料的自己と完全に代替出来るからである。純粹形相が実在的に形相のみである所以である。抑々上述の非対称はこの様な純粹に理論的な事態からのみ生じたのであつて、決して質料原理を輕視し、形相原理を偏重する觀念論的先入観から生じたのではないのである。

- 註(1) 質料的形相は狭義のトミズムでは凡べて質料を合成する形相一般の呼名である。上述した「全体の形相」*forma toius* がそれに該当する。しかしここでは質料の最少限度の自己の形相のみをこの様に呼び、この様な最下位の質料的基体と本性的に合成する、即ち、「全体の形相」となりうるその他凡べての合成的形相は、結局この基体を離れて実存しない限りでは、不可離形相 *foma inseparabilis* と呼び、合成するが離存しうる形相(人間形相)である限り、可離形相 *forma separabilis* と呼ぶことにしたい。
- (2) 連続的な現象変化に断絶的な時代的段階を設定するものを歴史的と名付ける。これは単に人間世界のそれを云うのではなく、自然自体の歴史性格を意味している。
- (3) 下位にある質料的形相では矛盾が漸く形相化したと云うべきで、形相の示す綜合性が最低限度であるため、断絶的反覆交替が実体変化の形式であるが、上位に赴くに従い、形相の綜合力が増大し、本質変化に於ける矛盾を中和化して、その実体変化の形式は次第に連続的発展的交替となる。弁証法で云うと同一矛盾の両契機に対して綜合の契機が必要の最低限度から出発してそれ

の最大限度にまで増大してゆく場合に該当する。

- (4) 基体的なものの反覆的な歴史性は、上位の階層の総合的形相力によつて次第に発展的な歴史性に変型する。存在者の各層は類比的に多様なそれぞれの歴史的展開様式を有っている。そして上位のそれは下位のそれを規定するにしても、下位のそれは上位のそれをあくまで制約し、条件付けている。世界は合成実体に関する限り、この様に発展的な各層の、下から上に向つての集積的全体と考えられてよいであろう。
- (5) 能動理性の自然的光りが抽象的認識に於いて如何なる役割を演ずるか、又それが客観的対象の広義の模写説を損うものでないことについては拙稿「スコラの抽象理論の同一哲学的論拠克服の問題」「哲学」43集参照。

V

以上、質料・形相の両原理に基く純粹形相乃至離存形相の形而上学的な構成を考察してきたが、次に誰でもが形而上学的と認めることを躊躇しない⁽¹⁾この領域についてもつと詳しく述べたいところであるが、予定の頁数も既に超えたことであるから、特に精神の自覚自主性に問題を限つて論じてみたい。そしてこれを論ずる際、純粹現実態 *actus purus* 乃至絶対精神存在である神の存在、質料的な肉体と合成する可離形相 *forma separabilis* 乃至人間靈魂の不滅性の問題等は一応形而上学的に別途論証されたものと前提する。

アリストテレスは形而上学のラムダ篇で神的精神の自覚自主性乃至その自己認識性を2つの論拠⁽²⁾に基いて論証し、同時に人間靈魂では自覚自主性乃至その自己認識性は副業的、派生的であると述べている⁽³⁾。神の認識は最大最高のものを対象とし、その能力は神的であるが故に、この対象を完全に把握する。しかるに最大最高のものは神的本質以外の何ものでもないから、神的認識の本来の対象は正に自分自身に他ならない。従つて神的認識とは必然的、本来的に自己認識であつて、他者認識が存在するとしてもこの自己認識の中で始めて成立する。この第1の論拠に従うと神以外の一切

の有限的相対的な精神存在はそれが精神である以上、矢張り可智性の光りを有しており、又そうである以上、凡ゆる存在対象そして最大最高の存在に向うものである。換言すれば、最大最高のものに向う精神を有し乍ら、自らは有限的相対的である。従つて精神の本来の志向は決して自分自身ではなく、絶対者たる他者に向うことになるので、そう云う認識者にとっては他者認識が本来的で、自己認識は派生的であることになる。そしてこのことは神でないところの有限な精神的存在、即ち、離存形相たる天使、可離形相たる人間のいづれにも妥当することである。

ところがアリストテレスの第2の論拠に依ると「質料をもたぬものは不分割である」から、質料の介在しない純粹理性では形相的な知るものと形相的な知られるものとの間に区分がない。即ち、知るところの主観は知られるところの客観と同一であつて、これは自己認識に他ならない。神は質料なき純粹形相故、神的認識は本来的に自覚的である。ところが人間は先づ感覺的に認識を始めるが、そこでは質料的な条件が支配しているから、認識と対象との間に区分がある。従つて人間では他者認識が先行し、自己認識が後行する。アリストテレスはこの第2の論拠を使用して第1の論拠で神的認識について証明をしたのと同様のことを証明したが、実はこの論拠によると何も絶対者である神でなくても、従つて有限であつても、質料を伴わない純粹形相でありさえすれば、それらの凡べてにとつて自己認識が本来的であると証明される。しかしこの様に自己認識の本来性を拡大すると実は第1の論拠による証明とは食違つてくる。何となれば、第1の論拠では自己認識は最高最大の絶対者にのみ独自のことで、それ以外の一切の有限者は、純粹精神である天使も、肉体的精神である人間も含めて悉く他者認識を本来的とすると結論されるからである。

この食違いは第2の論拠で神を単に純粹形相 *forma pura* と見たことから生じたので、実存の現実態たる純粹現実態 *actus purus* のみが神で、本質の現実態たる純粹形相は未だ神でない、そしてその様なものは如何に形

相的であろうと純粹現実態に対しては未だ可能態に留まると、こう主張するトマス・アクィナスの命題^{テーゼ}が出てくるまで、このことは見過されてきたのである。本質に対して実存の優位を説くアリストテレス哲学の特長も、本質主義に立つプラトニズムがこの様にトマスによつて明確に克服されるまでは中々捕え様がなかつたのである。第1アリストテレスの著作自身にアリストテレスの志向していた方向を裏切るプラトニズムの多くの要素が残存混在していたのであつて、この第2の論拠自身はそのうち尤なるものである。「質料をもたぬものは凡べて不分割である」とのプラトンの一者観が質料的基体から完全に離存した純粹形相の数多性を説くトマスの天使論と矛盾することは確かであるが、しかしこの同じ原理がスコラ学の抽象理論にどの位深刻な影響を及ぼしたか、又それをどの様に克服すべきであるかについては別に論じたことである⁽⁴⁾。

とに角この考へ方に基いて神的認識にのみ独自の自己認識性、その本来的な自覚性が有限的精神一般に敷衍され、そして有限精神の最下位にある人間の肉体的精神にまで敷衍されてくる。神の自覚は天使の自覚であり、人間の自覚である。神は人間の自覚に於いても自覚する大我であり、人間は神の自覚に興る小我である。人間の真我は神の大我であつて、ここにインドの自我哲学^{アトマン}に由来する汎神論が息づいている。ここからアリストテレス哲学の第2の論拠に由来する上述の論議、即ち、人間認識に本来的である他者認識は実は人間の感覚認識に由来するとする論議を今一度見直すと興味深い。自覚こそ人間の真我の働きであるとする新プラトン主義的なアリストテレス註釈家は遂にアリストテレスでは未だ人間認識を特長付けていたところの感覚性を全く根拠ない消極的なものと考え、一切の経験的起源から離れた先験的自覚にのみ認識の根拠を求めたのである。そしてこれがアヴィチェンナの「空中人間」によく表出されている⁽⁵⁾。

しかし私はプラトニストが好んで援用したアリストテレスのこの第2の論拠には立たないつもりである。寧ろ第1の論拠に立つて自覚的自己認識

的であることが本来的であるのは神にのみ独自であり、その他一切の有限的相対的精神存在には他者認識が本来的であつて、自己認識は派生的であるとする。この点で実は天使も人間も同様なのである。人間の感覚が他者認識の根拠でなく、天使も人間も含めてそれらのもつ有限性相対性が他者認識優位の根拠になる。第1の論拠が示す通り、存在一般を志向し、結局、最大最高の絶対者に向う理性乃至精神は自らが有限である限り、本来的に自ら自身に向うものでない。それは寧ろ本来的に自分自身を超えたものに向うものであり、その意味で一切の有限者は本性的に脱自的である。かくて自己認識乃至自己還帰はその様なものにとつては二次的であり、派生的でしかありえないのである。純粹に精神的なものでも自覺的自主的であることが本来的であるのでなく、むしろ本来的に最高最大の絶対存在を志向するので、そのため自己の有限存在を脱自しなくてはならない。ここにその本性がある。そこでこの様な存在者の自己認識は絶対他者への本来認識に後行し、従つて汝（絶対他者）の認識あつての自己認識になる。有限者の自我の底は意外と浅いのである。自己認識での汝（絶対他者）認識もなく、ましてや小我認識での大我乃至真我認識の有りよう筈もない。あくまで脱自的他者認識あつての自己認識である。但し、ここで問題となる先後関係は必ずしも時間上のそれだけでなく、本性上の順序であることを断つておこう。

そこで純粹精神でも人間精神でも精神の本性上基本的に絶対他者の認識に向う点で両者共変りはないが、人間認識は特に感覺的であることに依つて先づ比例的対象である物質と云う他者領域に向い、而して下から上への類比的抽象によつて、生命、精神の他者領域を経、最後に本来的な対象である絶対他者の認識に向う。つまり人間精神はその質料との合成性格に基いて、あくまで^{アポステリオリ}經驗的な経過を辿つて認識を進めるので、この点先験的な知的直観に基く純粹精神の認識との間に大きな相違がある。しかし一般に有限的精神の本来的対象が有限の自分自身でなく、無限の絶対他者である点、

そしてその為に本性的に脱自的である点では全く同一である。人間認識がその比例対象である物質をその本来対象と錯誤する時、物質的他者が絶対他者と置き換えられ、そこに物神性を伴った唯物論が顔を覗かせる。それに較べると純粹精神はあくまでも知的直観的で、本来的対象である絶対他者を意志に依つての外、取り違えることはないと云つてよい。

さて純粹形相についての質料・形相論的構成を以上の見地と比較してこの論稿を終ることにしよう。純粹形相は離存形相として質料的基体に依拠せず、もし依拠するとすれば自分に依拠するもの故、それは自己還歸的であり自覚自主的であると云われるが、この論法でゆくと純粹形相にとつて自己認識は恰も本性的であるかの様な印象をうける。しかし純粹形相が質料的基体に依拠しないと云うときの依拠とそれが自分自身に依拠するからそれが自覚自主的であると云うときの依拠とは大変な相違がある。前者の依拠は本性のそれであり後者のそれは^{ベトツス}適性のそれである。それ故、離存形相が質料的基体に本性的に依拠しないからと云つて、そこから必然的にそれが自分自身に適性的に依拠しなくてはならないと云う結論は出てこないのである。寧ろ合成実体の形相が質料的基体に本性的に依拠することに依つて現実態に於いて実体たりえたのに対し、離存形相はそう云うものなしにそれ自身だけで現実態に於ける実体たりうること、云わば本性的に自分に依拠することが結論されただけである。本性的次元から自覚自主の適性的次元の結論に飛躍するのは少々無理である。

IVに述べた様に純粹形相は本性附与の原理としてでなく、適性附与の原理として「可智性の光り」を一切の存在者に投射し、その一切の存在者の中に偶々有限的自己が含まれているが故に、それは自己認識を成就したのだと云うところを注目しよう。即ち、純粹形相にとつて本性的に第一義的であるのは、それが本性的に質料的基体に依拠しない為、既に形相的に現実態にある何らかの存在対象に単に適性的にのみ現実態を附与すると云うこと、即ち、それが認識者であると云うことであつて、それが自己認識者

であると云うことではない。自己認識は純粹形相の可智性が存在一般に及ぶ場合、その存在一般が自己を含むことから派生的に生じた一認識である。勿論、純粹形相が自己認識しうるものであることは、その対自的な主体性格を認める見地からは甚だ重要である。しかし多くの人が予想する様に純粹形相は本性的に直ちに現実態での自己認識者でない⁽⁶⁾。それはアリストテレスの第1の論拠から云つても、認識者として本来的に絶対他者を対象とするものであり、又以上述べてきた質料・形相論的構成から云つても、その第1現実態に於いて自己認識的のものではない。その第2現実態である完成態に於いて、即ち、適性的に自己認識的であるとしても、そのことは純粹形相の本性的規定に属しない。自己認識は純粹現実態たる絶対他者[■]にのみ独自の本性規定であり、純粹形相たる相対的精神主体の本性規定にとってはその外側にある。純粹精神に於いて既にそう云うものである以上、肉体的精神たる人間認識が尚一層その様なものであることは多言を要しない。純粹形相領域の体系理論的に厳密な再構成がプラトニズムから近代の觀念論的主観主義を貫く同一哲学的自我思想^{フーマン}の批判にどれだけの効果をもつものか、又それが絶対者を「我」とみる汎神論を排して絶対者を「汝」とみる啓示神論にどれだけの哲学的寄与を齎しうるものか、何れも未知数であるが、論究をここまで推し進めて来たものは実はその様な関心であつたことを附言しておく。(1963・10・21)

註(1) 正しい意味での形而上学は既に自然学から始まつてこの領域に到るのであるが、Iに述べた悪い意味での形而上学は専らこの領域のみを対象とする。従つてこの対象領域は形而上学を善悪いづれの意味に解しようとも文句なしに扱われる領域であると云つたのである。

(2) 第1の論拠は Aristoteles: metaphysica 1074^b 15—35.

第2の論拠は Aristoteles: metaphysica 1075^a 7—10.

(3) Aristoteles: metaphysica 1074^b 35.

(4) 拙稿「スコラの抽象理論の同一哲学的論拠克服の問題」「哲学」第43集参照。

- (5) 拙稿「自覚の先験性とアヴィチェンナの『空中人間』」石原謙先生記念論文集
(岩波) 参照。
- (6) 多くの人々は人間は現実態に於ける自己認識者でなくても、天使はそうである
と考える。確かに知的直観的である以上、天使の自己認識は實際上現実態
であろうが、それは天使にとって本性的第一義のものでない。寧ろ天使にと
つてさえそのことは偶発的、従って適性的でしかないのである。